



碗久松山物語
二

^13
3916
2



門へ13
號3916
卷2

松山柳巷話説卷之二

東都

曲亭主人編次

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈



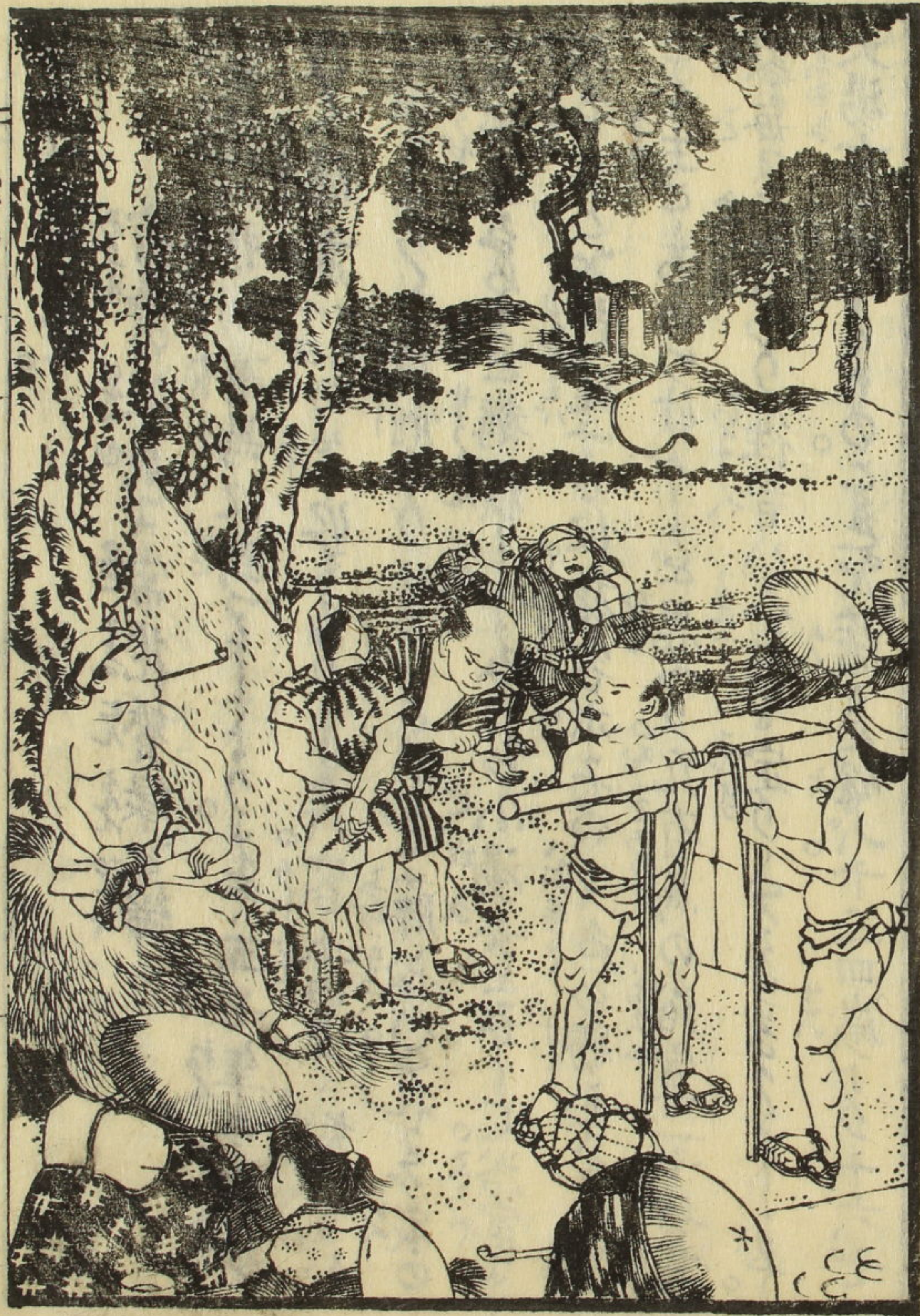
豊久野の悪棍その友を殺す
 豊久野に赴きて澄七に十五貫の沙を償う。遂に夫團平を救ひ
 出して劍尾の伴ひりの常花が孝なむく身と賣しと又捨別有馬
 の旅客藤松が是彼首尾を物ぐる。團平望く驚きける面色
 一六あしをさるるゆゑの常花ハ義理ある子なり彼と賣て六
 三が身活るやうひま一縦二三里が程後ろも直に追蒐て引
 戻すべしとぞ強まる金と遁するゆゑと焦燥く二三兩の金をさて握

公山卷之二

一

つ拂ふ捧ふ諸脛を薙とち倒せ。圓平が跳り上り。捧もおぼしと歩程に苔六ハ二声も叫びぬ。忽地頭をち砕りれ。脳髓出と死しりたり。すんが物ゆつとひそめ死ぬ。兩人屍を扛りてゆく。野中の菽澤へるげいさくうく。こそ立ゆりて件の酒と温ぬ鯛と飯干とくろせ。小喫を澄七ハ酒量薄くておろくも酔外すとて。圓平竊に彼が懐とりの探り十兩の金を奪ひて。走り出んとす。澄七猛に眼を睜き。圓平が腕と丁ととりて。刃を起し。大盜と罵つ。踵く踏く。咽をいしくおめ。りる。澄七ハ

足と岡搔き暗とそらさるに。息絶ぬ。浩所ふ心井。嚮に夫とんうらむひと。彼此を索まどひ。火燈を夜の及つとめて。さやうる挑灯をま。提ひあてる。澄七が門の戸がららると。引ぬる火影。夫婦顔とんあ。その忘井。りか夫りとの。せもあ。挑灯へ。と投る。茶碗の礫裡る。行燈のろき。に弗と吹滅し。圓平ハ。紛と背門口より。往方もあ。逐電す。類稀る。悪棍り。うくて。澄七が横死の。夏天明と後。人た。是を。驚き。さう。村長が家に告。く。村長。縁由と。國司へ。祈まう。り。伊勢國ハ。北畠具教卿の。采地。る。ふ



豊久野の
銭松



きりにくるぞと。

有馬の温泉の常花替縁を締

常花の撰列有馬に到りしより。たや五七年の春秋を

経く織素の年にしりくバ容止しりく婢妍を

ざるまきく。伶俐りけり。くくてぞ藤松ハこれか家の

聚宝盆をりくと稱讚しするら小湯女とあし七浴室を

浴衣をどと持運するに旅客ホその才色の勝るるに愛

せく生ごらりのつけぐと思ひ凡有馬の浴室二十坊其

家毎の婢女あり往昔八人数も定りしりくりしりや。

大湯女と稱するもの。こまを薩と呼ぶ十三四歳より十六七

歳よりを小湯女と稱しりも艶妓として声妓るるを擇ぶ

そのの旅客の陪従して衣服をぬぐりきり。さて侍女

のごとく酒宴の席に侍りてハ絃管のあしる小哥を唱せ

以有馬節是より又入浴するに幕湯幕間挨拶の追込

の名目ありてその人の貧福に従ひ旅客の好む任を春の

頃より夏に到りてこま来つゝ湯治するもの幾万人といふと

あり。此ころ伊勢の國司北畠權中納言具教卿の老臣同

國阿坂の城主より大宮忍齋が家隸に宛石宗達といふ

ものあり妻ハ世と早うして一子又之助十四歳より。又是が若

黨に田井八太郎を呼ぶものハ又之助が乳母子にて忍齋が

組下の足輕田井雲内が一子あるが年僅に四丈の秋父の
雲内世と去るも宗達より憐れ孤を家より引きて扶
助し雲内が妻野崎と又之助が乳母として母子ありま
に養ひぬくつて夥の年月を強く又之助十二歳八太郎十六
歳といふ年の終つて野崎ハ船江久平といふ若黨と密通し
遂ふその事發覚く男女ありても奔れりあくるに八太
郎ハ年弱々までいひて正しきものも母が淫奔の事
を面するがゆひといひ信ぢふ仕しるが宗達も野崎とこそ
憎め彼仕伎が志の切るるをよみて恩耦殊に厚く死
ハこそ死宗達ハ年来腰痛を患るをよめて撰別有馬に赴

きて湯治せむとありひし今茲五月の上流主君大宮忍
齋に縁由と申してあがりの暇をぬり息子又之助若黨
八太郎をねく彼地へ到り湯本の谷町なる藤松が家に逗留
し入浴すると廿日あまりにむび持病の腰痛頓に愈て
身體健なるぬげふらの温泉ハその性温和うして辰砂の氣
を帶味の鹹くして潮のごとくよく血脉を潤下焦を暖め氣
をめぐらし瘡冷を去ると唐土驪山の温泉も等しくこが
朝第一番の名湯なりと云は當初嶋大臣此湯を認めてより
舒明孝徳の兩天子行幸の跡長く修り行基菩薩の昆湯
の池水深きと今も入口は膾炙するなる名譽の温泉なりと

宗達が病苦立地をこころ果つるも理あり。宗達主従ハ
 旅宿の徒然あるまじし。むら近き名所古跡を訪りなく
 覽せんまじし。有馬の神社温泉の徳守を拜礼し或ハ温泉
 寺の縁起とてね清涼院の由来を問白石蜘蛛鼓が龍ゆハ
 律師則祐の狂歌もわひ出ら湯槽蜂尾瘤坂小こけ登り
 てハ茶師如来の靈驗をみる久龍せ落葉山夏るハ寒ま
 有馬の富士有明樓ハ若葉に茂つて妬湯ハ藤松が注連の
 内にあり彼妬湯の縁故と尋ねに藤松が先祖ある松二郎
 といふの後妻ハ嫉妬うらうらなり夫婦の間睦らうらざる
 にめらねど松二郎いふに壯年あるとて藤とほが湯女ハ夜

ばひて他まなく驚つた件ハ藤ハ容止世ハ務まそ。いふに又優
 ありらるるにぞ御の仕儀ハ松二郎を精由あるとてまろく妬くや
 思ひんその頃の小事に松二郎ハ有馬の松ハ藤とせら
 まそねむげあると唄ひしを彼後妻めてやそのころを猜し
 りて死んで物狂しくなりしハ人まむをまてよりも着ず
 婦ハ昼夜狂ひあると程ふハ神己に疲勞まそ湯本ある湯
 坪に立より揃ひてとて飲んせしぐ過て湯坪の中に落
 遂ふまそなくまりにたり。うて後妻の怨み出さるて夜も
 いく程まそまそあり。あつて松二郎も命危うしと権者の法
 かによつてうらた命を拾ふてよりよと郷人ハ松二郎を俣号

ありて松とゆひつ。又彼湯と妬婦と稱く。按かふふらふら
 後妻の和訓あり。和名鉄くんとを。今妬婦と書るのその
 美しき。詳き。さうらうらにその子孫世々松をのりて家
 号とするるべし。さふるれ怪しき。彼家の男女の。私小
 夫婦の相語とる。死に妬湯。俄頃。怒涌て鯨の潮を吹か
 ぶ。常にあらね熱湯の八面へ散れ。て草木を枯し入の
 唐と傷るに至り。る。日と夜でも冷る。是併後妻の
 怨心まき。湯坪に負縁て末世とりども。私情と妬り。く。ま
 くら。彼湯の積つ。出ることある。その家に密通の男
 女の。ありて。巖穿鑿し。ま。追出す。

せ。熱湯。怒涌。て。故。り。と。て
 藤松が家の湯女。い。く。怖。そ。その行ひを。情。な。れ。が。却。て。主
 の。僮。侍。と。り。つ。今。の。世。中。の。怪。異。な。ん。ず。と。り。ぞ。紅。顔。の
 女子。彼。湯。坪。に。立。上。り。と。死。ハ。天。結。陰。入。湯。の。あ。り。と。あり。と
 り。さ。れ。の。外。も。禁。忌。多。一。葦。毛。の。馬。滋。藤。弓。白。羽。の。矢。奪。
 飼。ホ。見。る。り。び。り。當。所。の。領。主。湯。の。山。に。獵。し。て。温。泉。の。神。を
 射。り。り。領。主。忽。地。落。馬。し。て。殪。す。件。の。弓。矢。馬。ホ。其
 だ。領。主。所持。の。もの。を。今。に。と。忌。と。り。や。宗。達。父。子
 主。従。ハ。と。古。跡。と。一。見。し。又。妬。湯。の。由。来。を。さ。す。と。ま。き
 了。小。嗟。嘆。し。て。己。が。宗。達。ハ。跡。と。と。り。又。和。哥。を。嗜。り

家累の準備に當地の名産竹器木地の挽物有馬
 鍛冶が小刀裁刀楊枝湯の花鳥子紙管小笠筆など
 懸買しつりたるに筆工いとよく洛にも恥すべく賞翫す。
 今も彼所より出ず筆と諸國の商人受ゆると言ふを賣る。
 大筆あり小筆あり所謂有馬筆と稱る小児の翫は管の
 中より人形の出入する機関ありと云ふ又餘國にわらざるもの
 毛より先宗達ハ兩の日の筆のすまじい書捨る草多
 ろるを常花ハ折る夕餐の給待すよく不憶彼草を
 ころにいと愛く死もあらず宗達に對ひてこらへる短
 冊一枚をゆきせぬ人と云ふ宗達微笑くは筆ハ小湯女

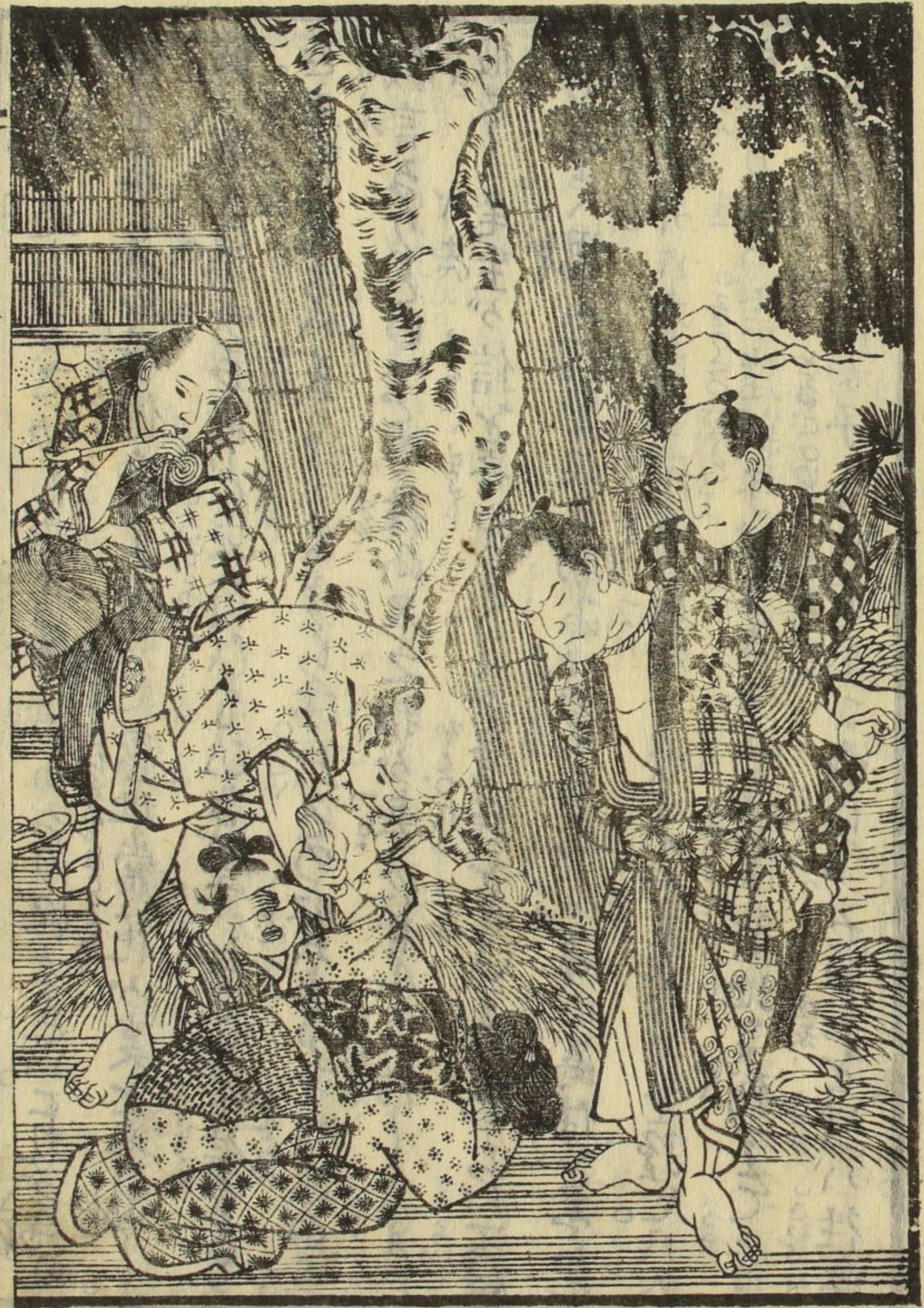
きたにゆきぬぐもあられねど汝が頃日信守の款待をんふ
 びざま 伶俐顔色も艶くりりり家の新婦とるらばと云
 ろる又之助に妻すべしその一件を美引ハ短冊ハ望しきりて
 幾枚よりをもとらせんぞと戯るを常花ハ實言ギ七形を
 改めこが身ハ伊勢の國掠本の郷ふせまき幼きと死父を
 書ハ母又往方もあくるりて外にころねもあられぬものも尚親
 方ハ仕せし身と償てごふあつらへりて推辞はらんといふ。
 宗達もすくうち咲くさその汝ハ故國の人こそと日まハ阿坂
 の城主大宮どの家隸ハ宛石何がと噂くもの之阿坂と掠
 本ハその間まくらすといふ新婦をゆき方るま。さらば短

冊をどらせんとして臂ぢりあると二枚をりうのどろく又い
 かり是はうぶ子と誓縁の聘礼きまごんく秘藏せし両三年の
 間うへりるらず迎へとるべんぞと詭きつ彼短冊をよみま
 常花ハ左右のみに受くとまをころふ

新千載

後撰

津の國のむらもくもる有馬山のきまをさ雲でてる引
 ちだりさるうもた神をまがりくす多の松山浪とどろく
 古哥二首と書ころるまは数回戴捧くいとうれいげぬ退出
 りりくして宗達ハ帰路の期こもるりくく主従三人有馬を發
 足して勢列へ立願るに常花ハ名残ををき涙さーぐて別
 りりして宗達ハ伊勢に願りてより所勢に暇まくて五七年の



春秋を過し。又之助もや廿餘歳ふるりにまじ。これが爲に
婦とえらぶの準備あるふつ死て忽地常花が夏を告げし
彼ハ賤き湯女をまど立行ひもひるびず。むごまも信守あり
き妻と娶るハ氏ももよらすが。只その賢るるを擇ふあり
戲言るりといへども往ふ又之助が妻にせんと約し。まじ
彼り尾生が信を守りてく。ら音耗とまうことあらば不後
るのそく思の程を又之助ハばえあら。るの爲体をあらん
爲小田井八太郎と有馬へ遣。たるふ七日をり。を控て八太
郎既り來つ宗達親子にまうすや。僕彼地。到つて常
花と回ら。彼女子今ハ有馬。ゆら。その友とば。往年

が主彼呼を發足し。ひつ。次の日。う。妬湯漬出て鳴と雷
の如し藤松の形勢に驚き。怕是園宅の湯女と集合て誰
ら密夫とあつるを責問。い。答るののる。と。ま。彼
問是。問て穿鑿いと嚴重るり。う。思ひも。け。常花が
近曾立既りのひく。旅客に妹夫の縁。を締。ゆ。を
友松。疑て。その。い。る。人。と。問。白。地。の。ま。う。て。夫。と。た
の。い。る。人。の。恥。り。と。の。い。す。温。泉。の。ま。う。く。熱。湯。と。漬。守。程
に。旅。客。の。ま。う。他。呼。の。宿。を。う。ら。ん。と。い。の。友。松。大。小。迷。惑。し。く
せ。ひ。る。く。常。花。と。追。知。し。其。の。身。價。を。償。せ。ん。ぬ。に。越。路。の。三。國
へ。賣。り。を。と。り。て。常。花。ハ。三。國。の。花。街。に。至。り。て。只。其。の。金

頼むと謀りて死。七郎二が先祖よりける鳥屋尾重澄精なる
 米とめて馬と洗ひぬらして寄るの軍兵に命を奪はれ
 に誑れさせられ城中水も乏しくらずを圍とせ死せざるを
 のとらる城を白米の城とも傳ひつ。今の七郎二は太宮忍齋の死
 属して家隸のてくゆくめと先祖の有功の武士ありあつるふ
 七郎二は宛石宗達と和哥の友にせしむと信守ふ交参しつ。此
 度宗達が有馬に湯治するを羨むのうきもよくてくづく
 の趣を城主に告えきつ。旅の用意をきりりたる宗達は元來
 湯治ふむく只頼常花が往方とあらんとおもひつ。此の伴侶を
 好まざるども明白の推辞がてして七郎二にゆかり風流の

旅とせんものに従者もくづらる。そも急ぐぬ路るまはる力と
 こそと只二人あて發足せむるゆゑなりも樂しくるべし。その
 七郎二が従者とめて死てゆく。後の安を憚りて思入
 隨ひ彼女子と索ぐ。死故あるべし。七郎二はそのとらるを
 こそとこそとおもひて應て互に従者を列す頃しも五月の送繼
 晴に杖よ登よといわがて阿坂山遠を啓行なり。又之助の父が
 身ひらうにゆくを。むりもくはひひきから往年にハ装補
 るるをりて走りゆぐりもあつが隨ひあつ。今ハ既ハ年も長
 て新ハ君の禄と食ハ何夏も便なり。せむくハ太郎よりとも
 おく行ぬ人と勸ゆる。くどとせむくハ昔のむらぶを許さねば

思ひこびつ。七郎二は父かう人を殺せ八太郎もろとも。その日二里あまりを送りゆたて遂に袂をうちつるをぞ。

妬婦が舊壘温泉に宛石父子に憑る

宛石宗達ハ鳥屋尾七郎二を伴へて撰別有馬へぞ啓行つ。通路多へやう。その人のしが年来の親交あるふ此度彼地へ赴く。縁故とあへやうの夏ふ望とく伎多うらんとして竊に常花がうを物ぐこまが七郎二は頻に嗟嘆しあつらばりこまを力と殺てその往方を索ぬべし。まが有馬に到りて外多うら可定ぬれ定うららふ越路の三国は七郎二もむきあふといふ宗達いひこまもあき覺て日るら湯の山ふ着らば亦友松が家に宿す。

日にく入浴するの往ぬこ人來つら七年の昔もまがまの回されあて宗達とあへやう。まが初めく款待むで宗達ハ外夏のかうに常花が夏を問ハ越路ゆく賣りえら且こらり。まが五年にむつらまで何国にあるやらん。その往方ハまがむきあふといふ。三国はまが索ぬことも究て索當んこらむむつら。まがせまがくせまがまが。あはびくふ七郎二と詮合するふ。まがころハ五月雨の間まが降るらして晴る。日ハ稀るると越路まがのゆくを行べき。は所ハ諸国の人の集合るにまが放すふむ問ハ。まがらまが。旅客の中に彼が往方をあへやう。まがむきあふを以て黙止し。まが且くこら還苗し。まが廿日まがまが。まが飯路の期もららる。

宗達の本意を遂げむべしとて、
懸念ありけるある夕霞の日光をうらうらと見れば、
漫行するに湯本より五町も入り南なる谷蔭に一條の温泉ありて、
そのほとり古く墳墓ありけり路ゆく道はなほあてこたへ
何人の墳墓ありやと問はば、その人答へて是れんひり、
二郎が後妻の想死に没したるを葬り、
常化が妻をとりひかりたるに、
七郎二をとりて、
短くて太舟ある蛇一隻墳の後より、
て来るをとりて七郎二もとりて、

より先宗達が旅宿の暮ふ燕巢を営て、
の徒然たる燕の雛を愛して朝暮に母の餌を運ぶと、
ても子と母の親と、
あてゑのいぬらぬ有馬の湯女が、
くはせど苦しみ、
とらりうして宗達七郎二、
一夜燕の親多しと悲しげ、
達ハ老の目さく、
太舟ある蛇一隻、
呑んず宗達との形勢を、

蛇を捕ひ落すわしも七郎二もあつた出くものうまに蛇をお殺せし
 うが宗達はその頭を突碎き二戸を押し明て假山のあつて投捨
 たりあるに次の日燕の雛も親もももる巢より落ちて死ぬるを
 件の二人と不審ぞつくつくとらんふいと赤ぢるる蟻数多緑類
 を伴ひて燕の巢を敗撃り又死する燕ゆも数千の蟻群とてあつて
 むりくぶらう痛と蟻の出るどころとを究げんとて庭ふら出つ
 假山の後へ至るに怪むべし昨夜殺しつて蛇一夜の中は齧爛て蟻
 はその腹よりぞ生るる勇まを常とする武士もあつた毛髪い
 だちて寢ぬそのあつた蛇にますものへあつたど舌を振つて
 驚嘆すとどども妬婦が舊魂今宗達がこゝろ来つて常花と索

るを妬と既の深く障礙をらすとあらはるる是よりして妬婦が墓
 の辺の流湯にのりるの觸るるのまはしその急忽地は死するると
 里人亦彼谷と地獄谷と名づけ又流湯の石を豊て井のどくはら
 毒禽湯と稱るると世のいひ多の地獄はらりさるる宗達七郎
 二いひや飯路の期にるびくが翌に故郷へ飯らんとてその準備を
 つとらにその夜俄頃七郎二が醫に瘡出来と痛をいへりて馬
 にも毒がころらんとていひひとり曲つて七日をり湯治せば愈
 べし其許に先へ立飯りて如此くの故めは免許の日限は後る
 をやてとてといひ宗達病む友を捨て飯らるるはらるるはらるる
 君の録と食ものへくる時とをいひに任せぬらるるはらるるはらるる

迎人と来す人きふ。さうつら保養志の入る。竹寧に惚えおれその朝
 只一人草鞋穿あめて立出たり。ひさ勢列阿坂山城主忍齋
 の日夕ぐまに郵端の風と待がねにひとり端ちう出する。ゆさ
 ころ頃有馬湯治にとて旅立ちる鳥屋尾七郎。その身血塗
 まるがら踏踏して掾のふりあり。忍齋とまどんく怪しや
 其許ハ何の程ゆる立取て人ふ傷つけらまるとを問ふ七郎。涙
 を潜くと落して某宛石宗達とまに有馬に到るを湯治せが。
 宗達の豫と謀反の志ありん彼地に逗留の間領主三好が老黨
 正交を造び内應して敵を引合んと残す某とまくとれを猜し
 まるく風凍あさり。が彼假に後悔のむら。り。班きて七郎二

を殺しぬ。身はさらけ惜ひぬ足らねど彼人敵に内を奪はゆ。
 布大事多ぶ。よりてそのとを討はまるとを思へ。形は消
 て多りなり。忍齋ハその怪異とんとて大に驚き。多屋尾ハ累代忠
 美の士なり。彼宗達に殺さる。とじんども忠魂未つてそのるを告ぐ。
 うち捨おくべたふあらず。をて俄小老堂を召集合て縁由を説き
 するお。も忽地一人の家隸走るとまを屋尾七郎二が妻密に
 祈へやすべたるもの。てさうつら一封の願書を持きて。正披露すれが
 せま。そのる。て。七郎二が妻に對面してその願書と。る。に彼
 る又夫の冤堀宗達小老堂。て。縁故を考ら。し。て神文を
 て偽らる。と。を書字。あり。宗達を討て亡夫の冤を雪ぐ。と。



公七卷之二

七



